

おい図書館



No.121

発行おい図書館

代表 青木和子

松本市牧の原1-104-416

TEL 047-311-0886

教育改革

フィンランドと日本の場合

神 惇子

4月21日(土)、定例会で「NHK・BS 未来への提言」フィンランドの教育改革「学力世界一」のビデオを見た。

学力低下を追い風に、全国一斉学力テストが実施された。OECD(経済協力開発機構)の学力到達度テスト(PISA)において日本の地位が下がっていることが問題とされている。そのPISAで2000年と2003年と続けて一位になったのがフィンランドだった。

東大の佐藤学さんが、フィンラ

ンドの前教育大臣(1994-1999年)オッリパツカ・ヘイノネンさんにインタビューする形で構成された番組だ。

ヘイノネンさんが推進した教育改革の理念をあらわす言葉が次々と出てくる。

当時失業率は20%、人口も少なく「ボトムアップこそフィンランドのアイデンティティー」なので、人への投資をすることに。「一人の落ちこぼれも出さずに国民全体の力を上げる」ための改革が行われた。ボトムアップの方法は徹底した「機会の平等の保障」と「現場への権限の移譲」。

「機会の平等の保障」について

て言えば、全国どこにいても同一の水準の教育が受けられるようにコンピュータを全ての学校に配置。コンピュータ教育の目的は、コンピュータを活用して自ら情報を選び、読み解く力をつけることであり、行政はそのための条件整備を行った(47年教育基本法第10条の精神)。その結果、フィンランドはIT産業が発展し、不況から脱出できたという。

日本では、規制緩和推進政策の中で、地方分権の名の下に義務教育費国庫負担制度が揺らぎ、格差が容認されるようになりつつあり、フィンランドとは逆方向へ進みつつある。

「現場への権限の移譲」とは地方自治体と学校に裁量権を移すこと。学習指導要領も教科書検定もない。学校の規模、人事、カリキュラムは自治体や学校が決める。それは教師への権限移譲で

あり、教師を信頼しているからで
きることだ。

ヘイノネンさんは「教育は自由
は欠かせない。教育は個人的で非
常に複雑な営みなので、モクベ
ションへ意欲」が最も大切」とカ
説する。教育改革は教師と連携し
全員参加の議論をして共通の認識
を持って進めた。

討議し、試行錯誤を繰り返して教
材を作り、カリキュラムに対する
保護者の厳しい批判を受けて説明
する教師たちの姿は、重い責任を
引き受けて凛としていた。教師の
社会的地位は高く、教員養成大学
への競争倍率は高い。教師に求め
られるのは、基礎的な力に加えて
ネットワーク力だという。

上意下達のシステムの中で服従
が求められる、殆ど物言えぬ職場に
なっている日本の学校は、フィン
ランドの学校と対極の位置にある。
フィンランドの改革の背景には、

生活に溶け込んだ「図書館」の存在
と、読書量、新聞購読率の高さ
など、フィンランドの文化的な
習慣・伝統があるという。そう
した歴史的・文化的基盤を無視
して単純にまねはできないが、
多くの示唆はあたえられる。

ヘイノネンさんは今後の教育
課題として、不透明な未来に生
きる次世代は内なる洞察力を
つけるようにすべきと語った。「
学校のために学ぶのではなく、
人生のために学ぶのだから」と。
哲学に裏打ちされた教育改革の
実践を本当に羨ましく思った。

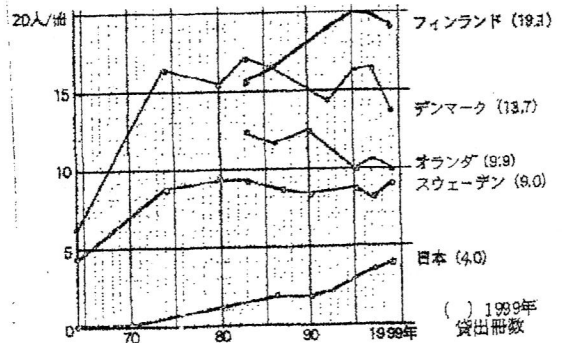
投稿

フィンランド



藤原寿一

島根県斐川町や萩県東郷(現東江町)
など、各地の図書館の設計をされている。
藤原寿一さんが一文を寄せて下さいました。



公共図書館での国民一人当たりの貸出冊数
(ユネスコ統計)
——日本は図書館発展途上国——

フィンランドは、面積39万km²
(日本37万km²)、人口520万人(日本
1億2770万人)の「森と湖」の国。
戦争のたびに国土は焦土と化し、
衰退しました。

国が採った政策は、お金の掛か
る「福祉」と「図書館」の充実で
した。その後「IT」産業に乗り出
し、わすか半世紀で世界をリード
しています。「命・情報・コミュ
ニケーション」ともいえる施策は

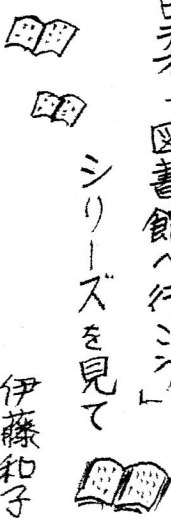
「人を基にした国づくり」と思っています。

経済協力開発機構(OECD)の国際学習到達度調査で、授業時間は日本より少なく、塾や予備校も無いこの国が世界一になったのも、人の基盤を作る図書館の「世界」と密接な関係があると考えています。

ビデオ「図書館へ行こう」

シリーズを見て

伊藤和子



- 一巻 子どもと歩く散歩道 9分
- 二巻 知りたいの味方 10分
- 三巻 わが社のデータベース 12分
- 四巻 本のある風景 7分
- 五巻 先生たちの本棚 18分

五月の定例会で、このビデオを見せてもらいました。

一巻は、初めての子育てに悩む母親に「図書館って案外おすす

かも？」と返事する友人の話。

二巻は、拾ってきたハムスターの育て方を聞きにきた子供達にアドバイスする司書の話。

三巻は、仕事上での調べものや、新しく企業を上げた人達の為に、資料・情報等が利用できる場所としての図書館。アメリカでは図書館を仕事場として人達が利用している(由)

五巻は、授業の下調べに図書館を上手に利用している先生達の話。：等々、夫々具体的に判り易く、短いものですから、ちよつとした時間で見られると思います。

それにしても、このVDに出てきたような、市民生活の拠り所となる頼れる図書館が在るか無いか、その町の文化程度というが品格・落ち着きみたいなものを現しているなあ！と、つくづく感じさせられました。

図書館とは貸本屋に非ず、知の財産が蓄積されている処、市民ならば誰でもが自分の生活の内容を

高める為に利用することができぬ、そんな大事な、人間でいえば脳にあたる場所が図書館なのだという認識を、せび、市長はじめ行政側の人達に持つてもらいたい。昨日まで土木課や水道課にいた人達を腰掛けのように何年間か配属させる部署ではないと思うのですかね？利用したい市民に対して応えられるプロ(司書)が必要で、図書館に対して熱い思いを持つている人材をせび探し出して、せめて近隣の町々に見劣りのしない程度のもので作ってほしい。

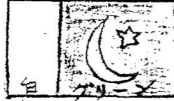
箱物をいうのではありません。我が家の大学生の孫が「松方の図書館には参考書が全然ないので市川図書館に登録して学校の帰りに寄ってくるんだよ」と嘆いており、人口50万近い街なのに、

取ずかしいではありませんか
 兎に角、近い将来、そんな文句
 が聞こえなくなりそうですよ、祈ら
 ずにはおれません。

その為にも、このVDをせび沢山
 の人に見て頂きたいな！と思って
 おります。

パキスタンのほなし

鎌瀬容子



六月の定例会にて、パキスタン
 人と結婚なさった遠山加奈さんが
 ら日常生活について語っていただ
 きました。

遠山さんは松戸在住ですが、二
 人の娘さんは、パキスタンのラホ
 ールで義理の両親宅より通学して
 いるそうです。両親宅には伯父さん
 や伯母さん家族が20人ほど一緒に
 生活をしていて、このような大家
 族はパキスタンでは珍しくはない
 とのこと。食事も常に誰かが作っ

ていて、とても美味しいらしい。
 数日前には気温摂氏52度を記
 録したが、家の中は天井が高く
 比較的涼しくて、クーラーは30
 度より低くはならないとのこと
 で、一体どのような暑さなので
 しょう。

娘さん達とは携帯電話にて連
 絡を取り合う生活で、国際間は
 こんなにも便利になったのかと
 改めて驚きました。

一方、引の爆破テロ事件より、
 パキスタン国内では、外国人へ
 特にアメリカ人に対して厳し
 くなったといえます。例えば、
 博物館への入場料も外国人は10
 倍高かったり、カメラやエック
 が厳しくなったりしたそうです。
 アメリカと友好関係にある日本
 人にも同様で、遠山さんがパキ
 スタンへ行く時にはベールを深
 くかぶり、日本人と思われない
 ように注意して歩くようになった

たとかい。

引事件はこのように影響を及ぼ
 していたのでよね。それでもラホ
 ール市内は比較的治安とのこと。

図書館へ行くこと、文字の難しい
 辞書のような本ばかりが並んでい
 るそうです。むしろ一般の絵本や
 雑誌の方が、日本人にも判り易い
 とのことでした。

二人の娘さんには、学校生活の
 中で一性の友人ができたといいま
 す。相手の立場でいろいろと忠告
 してくれたり、友人関係がとて
 密だそうで、今の日本の学校状況
 を考えると羨しい限りです。

パキスタンで生き生きと生活し
 ている人々の様子がうかがえます。
 しかし母として遠い土地の娘を
 思う時、私が想像できないような
 不安も時々あることでしょう。

主婦の目からパキスタンの暮ら
 しぶりを話す遠山さんから、元気
 と勇気を分けてもらいました。